



作品についてのコンセプト：

私は、人間の意識の伝達に興味があります。例えば、赤といえば赤をみな連想しますが実は個々の思いえがいた赤は違う。「同じけど違うのです」あるいは「違うけど同じなのです」それは、言葉やアイコン化または概念化されたものの中に隠されたずれです。現代社会は意識の共有に価値を求めすぎているように思います。「わかりやすいものが良い」などという言葉がそれです。

ひにくにも本当に「わかる」ということは「わからなくなる」ということでもあると思います。“無知の知”という言葉があります。今社会は（「平和」ということの代償に）温室育ちの野菜のようになっています。つまり、自然ではないということです。不自然なのです。自然は予測不可能な変化や多様性があります。それを排除していつている現代はいわば温室育ちの人間です。これは、現代人の脳への入力情報が均質化し平凡化しそして経験値が浅くなり結果出力が落ちる、そして均質化し平凡化または単純化していく。つまりは赤といえば、みな同じ赤だと思ってしまうのです。そういったプロセスを繰り返す。ついに違うものを極端に嫌う。キレルということだと思います。

私は意識の隙間にあるずれや余白あるいは気配を表現しようとしています。アイコン化した人体や特定の意味を持つ何かを多層に展開し組み合わせたりずらしたりまたそれらを空間にインスタレーションすることで意識の隙間にある隠されたものを感覚的に体感させたいと思っています。わからないことがわかる「知」も大切ですが、わかったことがわからなくなるというような「知」が現代の人間に不足な知ではないでしょうか。

北川一成